



新任挨拶

小児外科長 教授 内田 広夫

この度、8月1日付けをもちまして、大学院医学系研究科総合医学専攻 病態外科学講座 小児外科学の教授を拝命いたしました。名大病院の皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

私は、平成元年に東京大学医学部を卒業し、会津若松にある竹田総合病院で外科医としての基礎を学ばせていただきました。平成5年に東京大学小児外科に入局しましたが、私が小児外科を選んだ理由は、学生当時、不治の病であった胆道閉鎖症術後末期患者に対して海外では肝移植が成功するようになり、本邦でも肝移植を行いたいということでした。平成6年には自治医科大学に異動し、移植免疫の研究を始め、平成9年に大学院に入学、新規免疫抑制蛋白質MAY-Iを発見、特許を取得しました。平成15年には低侵襲手術で有名な埼玉県立小児医療センターに移りました。岩中督先生のもと多くの小児外科症例を経験させていただき、さらに内視鏡手術を推し進め、日本内視鏡外科学会技術認定医(小児外科部門)を新設時に取得することができました。その後、単孔式腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術を開発し、急性虫垂炎に対しても単孔式手術を確立し、安全性も高く、経済性にも優れていることを示してきました。食道閉鎖症にも低侵襲手術を導入し、治療が困難であった上部食道盲端と下部食道が離れている症例に対して、胸腔鏡下2期的根治術を確立しました。今までは開腹手術が主であった悪性腫瘍や肝胆道系疾患に対しても低侵襲手術を積極的に行っており、成長発達を妨げない、体に負担の少ない、整容性にも優れた低侵襲手術は小児にこそ必要と考えておりますが、低侵襲手術を進めることで、逆に開腹手術がより繊細に、正確になったとも考えております。

小児外科は、1,000gに満たない低出生体重児から中

学生まで、また呼吸器疾患、消化器疾患、泌尿器疾患と対象となる範囲が非常に広いという特徴があります。そのため日常の診療においては、産科・新生児科・小児科・成人消化器内科などとの連携が欠かせません。名大病院は質の高い周産期医療を行っており、多くの新生児外科症例が集約化されています。小児科も多くの悪性腫瘍を扱っており、小児がん拠点病院にも選定され、固形腫瘍も集約化が進んでいます。肝胆道系疾患も前教授である安藤先生のお力により症例が集まっております。つまり、名大病院は小児外科の王道を行く日本を代表する施設で、とてもやりがいのある恵まれた環境です。個人的にも長年の夢であった肝移植にも関わることができ、心が踊る気持ちであります。



私たち名大病院の小児外科医は、豊富な症例、専門家集団である他科の先生方をバックグラウンドに、多くの経験と高い技術を生かして、それぞれのお子さんにとってもっとも適切な治療法を熟慮したうえで、確実な手技で治療を行って行く所存です。また、低侵襲とはなにかということをやりに突き詰め、臨床および研究でその意義を明らかにしたいと考えております。

このように恵まれた環境にある名大病院ですので、今後多くの人材育成を行うことができると確信しております。皆様には、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

目次

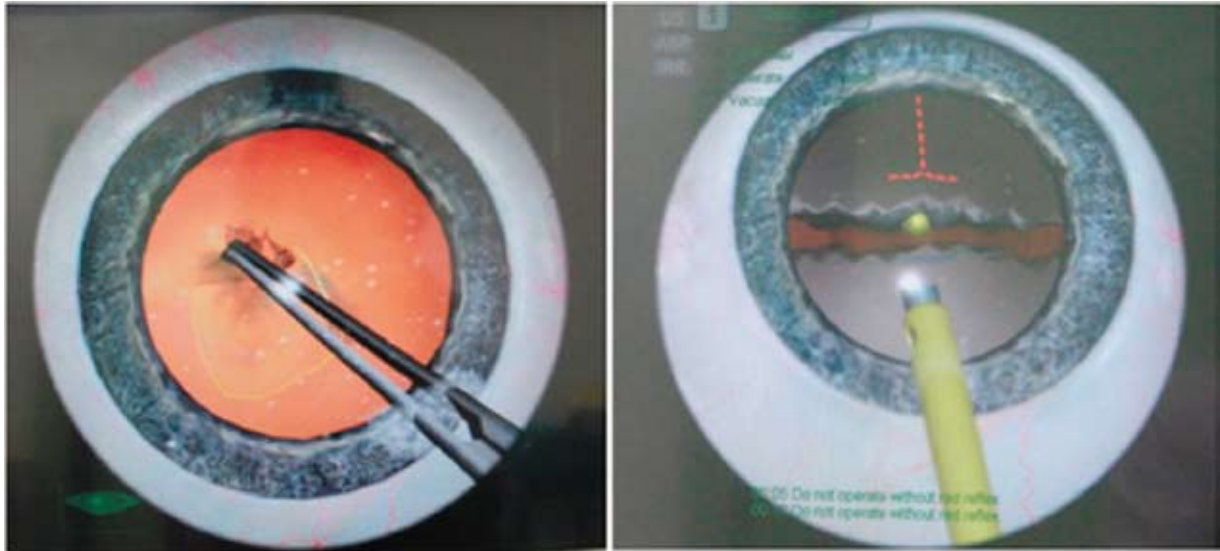
①新任挨拶.....	1	⑧研修医紹介.....	9
②クリニカルシミュレーションセンター(NU-CSC)の活動報告.....	2	⑨ボランティアさん紹介.....	10
③東日本大震災被災地域における地域医療研修を振り返って.....	3	⑩「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」の広告が	
④名古屋大学医学部附属病院の災害医療支援活動.....	4	2013年度電通特別賞を受賞.....	11
⑤平成25年度(前期)医療安全・院内感染対策・		⑪行事報告.....	12
医薬品安全使用研修について.....	5	⑫ナディック通信.....	15
⑥健康講座/眼科.....	6	⑬名大病院の医事統計.....	17
⑦高校生一日看護体験研修.....	8	⑭編集後記.....	18

クリニカルシミュレーションセンター (NU-CSC)の活動報告

クリニカルシミュレーションセンター 長谷川 裕里子

4月に開設したクリニカルシミュレーションセンター(NU-CSC)は365日24時間いつでも利用可能ということもあり、当初想定していた以上に非常に多くの方が利用しています。

その中でもセンター開設時にいち早く利用開始した眼科医局より、眼科手術シミュレータシステム(白内障・硝子体手術シミュレーター-EYESI※)の体験レポートをいただきましたので、ご紹介いたします。



眼科手術シミュレーターの画面

※このシステムでは、現実的な組織反応を体感しながら、白内障手術や硝子体手術における様々なトレーニングをシミュレーションすることが可能です。

***** 「シミュレーター体験記」 眼科 杉田 糾 *****

実際に体験してみると、まず眼球とその挙動のリアルさに驚かされました。模型眼の中に器具を挿入すると同時に仮想現実の中で眼内にセッシが出現し、自分の動かすままに目の前で眼内をセッシが動きます。私は白内障手術モードで前嚢切開・超音波乳化吸引のパートと、硝子体手術モードの内境界膜剥離パートを触ってみたのですが、模型眼に余分な力がかかれば実際と同様に眼球が変位し、同時に眼底からの徹照が減少して術野の見え方がリアルに変化し、拙い動きをすればするほど術野の視認性が低下するあたりは非常によくできています。また、眼内での操作に気をとられ創口に外力をかけてしまうことにより眼球をシフトさせて眼内操作を困難とさせてしまう、手術初心者の陥りがちな魔のスパイラルが容易に体験でき、セッシで膜をつまみ動かした際の挙動のリアルさとあいまって、眼内器具操作の習得には非常に有用と思われる。

一方で、実際に挿入されたマニピュレーターは、模型眼挿入口での接触・抵抗はあるものの、入った模型眼内では中に浮いている状態であり、当然のことながら実際は眼内組織から感じる微細な触感はありません。3Dの顕微鏡様モニターの見え方も非常によくできていますが術野の浅深に関する立体感を実際の手術顕微鏡と比べて若干の甘さを感じる部分があることは事実です。

欠点も述べましたが、EYESIは総じて非常によくできたシミュレーターです。触りたいと思わせる仮想現実の魅力もあります。若手眼科医の手術研修に役立つこと、また、眼科手術の一端を多くの学生に体感してもらって一人でも多くの眼科医が生まれることを期待しています。

東日本大震災被災地域における 地域医療研修を振り返って

2年次研修医 野手 康宏

この度、岩手県立宮古病院を中心とした東日本大震災被災地研修に行ってきました。この研修について、報告させていただきます。期間は6月17日(月)～7月12日(金)の4週間、研修先は、県立宮古病院、小本診療所、重茂診療所、田老診療所、山田病院、宮古保健福祉部でした。

今回の被災地研修を希望したのは、震災で大変な思いをされた方々の現在の心境や街の復興具合を自分の目で確かめておく絶好の機会だと思ったからです。

実際に伺うと、県立宮古病院は被災以前より医師不足に悩まされている状況でした。宮古市で唯一救急がある病院ということで、救急患者が運ばれてくる最後の砦となっているため、救急外来での人員確保は致し方ないところがあり、部長クラスの先生が当直せざるを得ません。そして、翌日も休む暇もなく診療に従事しなければ、宮古市の医療そのものが成り立たない状況です。

宮古病院以外でも仮設住宅で造設された診療所での外来診療や、外出困難な方々への訪問診療が行われていますが、いずれにしても人員不足は解決できていません。しかし、診療所や往診で医師と会話することで気持ちのストレスが減る、と患者さんからは大きく感謝されており、医師側も「ここでは最高の医療はできないが、患者さんそれぞれに

あった最善の医療を大切にしている」とおっしゃっていました。

また、宮古保健福祉部にも伺いました。宮古市の街の復興は順調に出来ているとのことでしたが、どうしても地域差は出てしまうために住民の心持ちにも差があるようでした。仮設住宅にある集会場を訪ねると、10人以上の住民の皆さんが来てくださり、宮古市の話や体調面で気になっていることなど、有意義にお話し出来たのですが、集るのは女性ばかりであり、男性は孤独になっているのが今後の課題だそうです。また、集まった方々はお元気でおしゃべりがお好きな方ばかりでしたが、全員口を揃えておっしゃったのが、「街の復興は出来ていても心の復興は全く出来てない」ということでした。

このように今回の研修をさせていただいたことで、テレビやインターネットだけではわからない被災地の情報や住んでいる方々の気持ちが少しは理解でき、また宮古で働く医師の、貢献したいという情熱を感じることができ、私にとっては衝撃的でした。各々の患者さん、地域、財政すべてを考慮し“最善”の医療を提供することが最も大事だということを肌で感じ、今後の医師としての人生に必ず生かして貢献していく決意が生まれました。このような機会をいただいた関係者の皆様には本当に感謝しております。



岩手県立宮古病院の宿舎からの眺め



岩手県立山田病院 仮設診療所

名古屋大学医学部附属病院の災害医療支援活動 (平成25年8月30日 時点)

名大病院では、平成23年3月12日に「東日本大震災医療支援対策本部」を設置し、各大学病院との協力体制の下、被災地への医師等の派遣をはじめとする医療支援活動を行ってきました。

その後も、被災地における医療ニーズの変化に対応した、継続的な支援活動を展開しております。

平成24年度

	派遣者	派遣期間	派遣先
医療支援チームの派遣	1名(医師・こころのケア医療支援チーム)	6月17日～18日	相馬地区
	1名(医師・こころのケア医療支援チーム)	7月22日～23日	相馬地区
	1名(医師・麻酔科)	9月3日～7日	いわき地区
	1名(医師・こころのケア医療支援チーム)	9月23日～24日	相馬地区
	1名(医師・整形外科)	10月1日～5日	高田地区
	1名(医師・麻酔科)	11月5日～9日	いわき地区
	1名(医師・整形外科)	3月11日～15日	北茨城市
卒後臨床研修医の派遣	1名(2年次研修医)	7月17日～8月10日	岩手県立宮古病院 等
	1名(2年次研修医)	9月10日～10月6日	
	1名(2年次研修医)	10月9日～11月2日	
	1名(2年次研修医)	12月3日～28日	
	1名(2年次研修医)	1月28日～2月22日	

平成25年度

	派遣者	派遣期間	派遣先
医療支援チームの派遣	2名(1名:医師・放射線科/ 1名:放射線技師・放射線部)	4月30日～5月1日	福島県立医科大学
	1名(医師・麻酔科)	7月8日～7月12日	いわき地区
	1名(医師・手術部)	8月26日～8月30日	いわき地区
卒後臨床研修医の派遣	1名(2年次研修医)	6月17日～7月12日	岩手県立宮古病院 等
	1名(2年次研修医)	7月16日～8月9日	

*平成23年度の支援活動状況はかわらばん88号に掲載しています。



平成25年度(前期)医療安全・院内感染対策・ 医薬品安全使用研修について

総務課リスクマネジメント掛

6月3日(月)～6月6日(木)の間、病院従業者に対し、医療安全管理、院内感染対策、および医薬品安全使用に関する研修を実施しました。

特に医療安全・院内感染対策研修は、医療法により病院の管理者に年2回程度の定期開催が義務付けられている「従業者に対する研修」に当たります。このため、上記研修期間後もe-ラーニング(またはDVD貸し出し)での研修を引き続き行いました。今後も、一層の研修機会の充実に努めます。

平成 25 年度 (前期) 研修テーマ

- ・ 医療安全管理研修では、患者誤認防止をテーマとして、患者確認ルールの標準化（入院患者の場合、外来患者の場合、同姓同名の場合）等について研修
- ・ 感染対策研修では、第三者による針刺し事故（廃棄方法誤り）、接触感染対策、手指衛生、抗菌薬の適正使用、風疹の流行について研修
- ・ 医薬品安全研修では、①経口ビスホスホネート製剤の使用上の注意点（用法に関する注意事項等）、②ビグアナイド薬とヨード造影剤の併用（重篤な乳酸アシドーシスを起こすことがある、ヨード造影剤検査前後の中止の必要性等）の2点について、当院での処方時アラート機能の紹介とともに研修



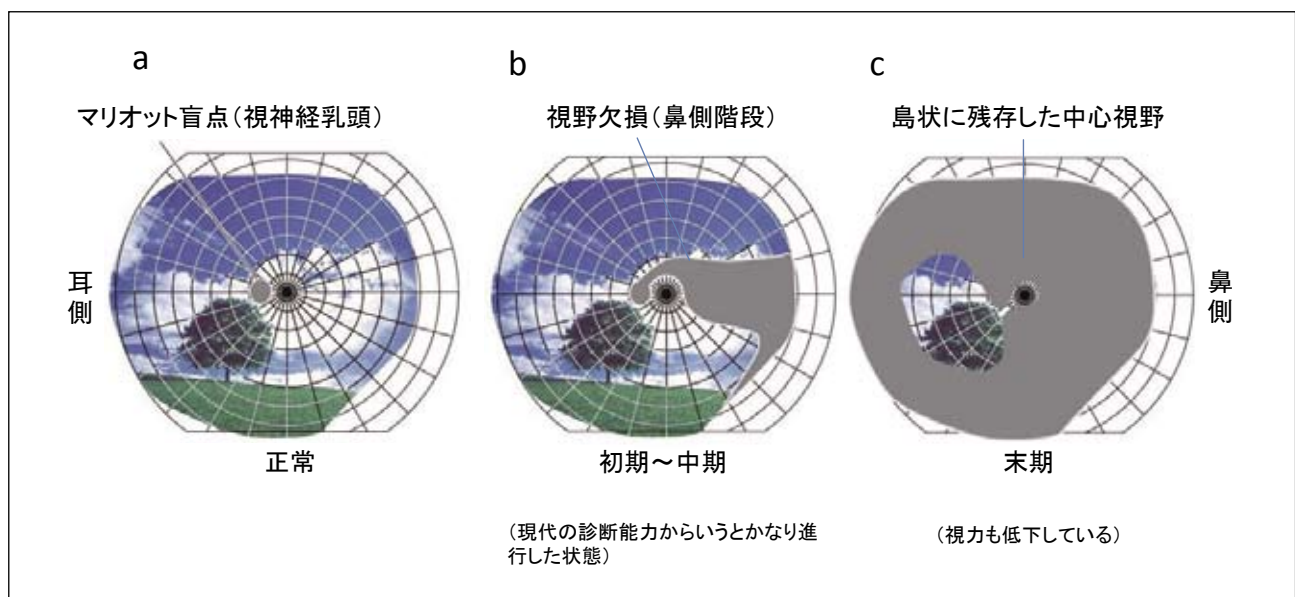
健康講座

眼の検診を受けましょう！視野が欠損しているのに自覚症状がない病気とは？

視野が欠損しているのに自覚症状がない病気とは、「慢性緑内障」です。眼科外来で治療していると、緑内障の自覚が全くなく、たまたま他の症状で眼科受診をして見つかる方が多くみえます。

緑内障というのは、網膜の神経線維が徐々に薄くなり、視野が欠損する病気(図1)です。以前は緑内障というと、眼圧(=眼球内部の圧力)が高くなることで視神経が圧迫されて起こると考えられていました。しかし、最近の疫学調査で、眼圧が正常でも緑内障が進行する正常眼圧緑内障が日本人では緑内障全体の2/3を占めるということが分かったのです。

図1 緑内障視野



平成12年から平成13年にかけて多治見市で大規模な緑内障研究「多治見スタディー」が行われました。40歳以上の市民から無作為に4,000人を抽出して検査したところ、「40歳以上の約6%、ほぼ17人に1人が緑内障を患っており、その9割は自覚症状がない」、「正常眼圧緑内障は緑内障全体の72%を占める」ということが分かりました。年齢が上がれば上がるほど緑内障が増える、と考えると検診を受けずにはられません。

平成18年に厚労省主導で行われた日本における成人の中途失明原因の調査では、緑内障が26%、糖尿病網膜症が21%、網膜色素変性症が9%となっています。このように知らないうちに失明の危険が迫っている病気として非常に重要な病気と位置付けられます。

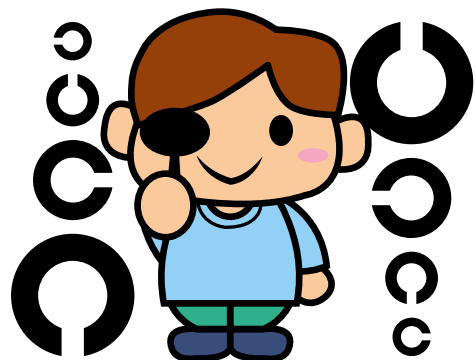
緑内障はかなり末期になるまで自覚症状がないので、定期的な検診と、早期発見・早期治療が重要となります。緑内障の検診では主に眼圧と眼底写真、最終的な診断には精度の良い静的量的視野検査が必要です。両目で、20分くらいで検査できます。しかし、最近では視野検査よりもさらに早期に診断できる光干渉断層計(OCT)という神経線維の厚みをミクロン単位で計測する診断機器が発達し、その器械に組み込まれた解析プログラムを使い、リスクを判定できます(図2)。

緑内障の発症には遺伝も関わっていますので、血縁に緑内障患者がいる方は要注意です。また、中年以降の近視の強い人(-5ジオプター以上、20cm以上離すと見えない近視)では20%が緑内障という報告もあります。高眼圧の緑内障と異なり急速に進行する事はありませんが、一度狭窄した視野は回復しません。早期発見・早期治療により失明を防ぐことができますので、30代後半～40歳を過ぎたら検診を受けましょう。

図2 光干渉断層計(OCT)の撮影



生体眼で病理組織のように精細な網膜神経線維を描出することが可能であり、神経線維の厚みを瞬時に計測し、解析プログラムにより緑内障のリスクを判定する。



高校生一日看護体験研修

看護部 副看護部長 若園 尚美

8月7日(水)に「高校生一日看護体験研修」を開催しました。これは愛知県の看護行政の推進活動の一つとして、「高校生に実際の看護の場を体験する研修を行なうことにより、これからの社会を担っていく世代に看護の心を理解してもらおうと共に、この体験を契機とし看護職を志望するものの増加を図る」ことを目的とした活動です。今年度は名大病院へ28名の高校生が参加しました。その内、男子学生は8名でした。

来院してすぐユニホームに着替え、髪を整え、まず病院長・看護部長の挨拶をいただきました。話を聞く高校生の真剣なまなざしが印象的でした。

昨年の研修ではスタンド式の血圧測定の実験でしたが、今年は感染対策の最初の一步であり、かつ重要な手指消毒を行ないました。蛍光クリームを塗って石鹸で手洗いをし、クリームがどれだけきれいに洗い落とすことができるかをチェックするグリッターバッグを使いました。爪に汚れが残っていたりするとやり直しです。



きれいに手洗いをした後、各病棟に分かれて配茶・配膳の体験をしました。「患者さんにありがとうと言われた」、「いろんな食事があった」など、初めての現場に目を輝かせます。一旦戻って昼食休憩の時間には、お互いに白衣姿を写真に収めていました。

高校生のみなさんはそれぞれが、「医療の現場を見てみたい」、「進路に悩んでいるので決断するために参加した」、「入院経験があるのだけれど医療スタッフの側から見てみたい」と今回の体験研修に対して目的を持って参加していました。自分の考えや思いをしっかり言葉で表現する姿をたくましく感じたりもしました。午後はわずか100分の間でしたが、それぞれが病棟の空気を感じ、スタッフの行動を考え、患者さんへの思いを新たにしていました。

参加者の感想を一部紹介させていただきます。「車椅子を押すのにもいろんな心遣いがあったり、体を拭く時にはしっかりとコミュニケーションが取れたので、とてもためになりました。大変な事や辛いことがあるかもしれませんが、とてもやりがいのある職業だと思ったので、看護師になりたいという思いが強まりました。」「今まで自分が想像していたよりも大変な仕事であることがわかったけれど、人のために働くことの大切さと大変さをより身近に感じる事ができたのでとてもよい経験になった。」

現場で看護スタッフが高校生に色々な話をしてくれている姿が浮かんで嬉しく思いました。

研修医紹介

研修医(医科) 高瀬 好

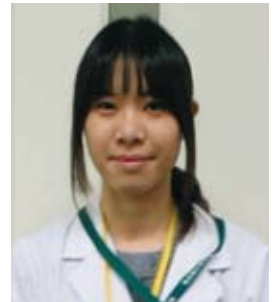
一年次研修医の高瀬好です。

研修が始まって6ヶ月が経過しました。熱心に指導して下さる上級医の先生や信頼出来る同期に恵まれ、充実した日々を過ごしています。毎日新しい発見があり学ぶことができる環境で働けることを嬉しく思っております。

自分の未熟さを痛感して自信をなくすことも多いですが、逆に今の自分の立場だからこそ出来る事もあり、様々な経験を積んで医師として、また人として成長できるよう頑張っており励んでおります。

患者さんと接していく中で、我々医療者が患者さんの大きな支えとなっていること、また自分も患者さんに支えられていることを実感しています。まだまだ至らぬ点ばかりですが、患者さんに笑顔になっていただけるよう精一杯頑張っていきたいと思っております。

今後ともご指導の程よろしくお願いいたします。



研修医(医科) 加藤 圭悟

一年次研修医の加藤圭悟と申します。

出身は岐阜市、大学は佐賀大学ということで、名古屋での生活は初めてですが、個性ある同期、優しい先輩方、教育熱心な指導医・病院スタッフの皆さんに恵まれ、非常に有意義な研修生活を送らせていただいております。

医者・社会人1年目の自分の力だけでは思うように目の前の問題を解決できず、周りのスタッフの方々の助力で研修する毎日ですが、2年目以降は自分で目の前の問題を解決しなければならず、その準備期間として、1日1日を無駄にしないよう頑張っていこうと思っております。

新しいことに向かう時には、及び腰になってしまいがちですが、その経験をこれからの医師生活に活かしていけるよう、精一杯やっていこうと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。



研修医(歯科) 山口 賀大

歯科研修医の山口賀大です。

充実した研修医生活を送る中で多くの事を学ばせていただいておりますが、特に実感しているのは名大病院の環境についてです。

歯科口腔外科が単独で全ての治療を行っているのではなく、時には医科の先生方に対診をして一人の患者さんに向き合い、また医科の先生方が歯科口腔外科に対診をくださる事もあります。このように医師・歯科医師・コメディカルの皆さんが相互に連携し合う環境の中で研修をできることに喜びと感謝を感じています。それと同時に、自分がその環境の中で相互に連携できるようになる為には、更なる知識・技術の向上の必要性を痛感する毎日です。

まだまだ歯科医師として歩き出したばかりで至らない点も多々ありますが、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。



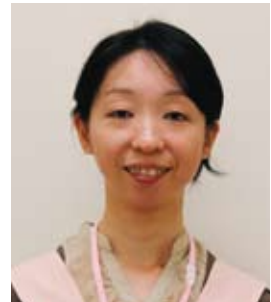
ボランティアさん紹介

山田 里佳

6月よりボランティア活動に週1回参加させていただくことになり、1ヶ月が経ちました。体を使って、できれば医療の分野で何かをしたいと思い、今回のボランティアの応募へと踏み切りました。実際にエプロンを着けて院内に立つと、「きちんとお役に立てるだろうか?」と、とても緊張しますが、先輩方や職員の方々にひとつひとつ丁寧に教えていただきながら、少しずつですが、周りが見えるようになってきました。

先日、小さなことですが、嬉しいことがありました。たまたま病院からの帰宅途中、駅のスロープを登ってこられる車椅子の方がいて、おかげさまで以前よりもスムーズにお手伝いをさせていただくことができました。貴重な経験をさせていただき、学ぶことが多く、本当にありがたく思っております。

早く色々なことを覚えて、自信と余裕をもってより良い対応ができるようになりたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



高柳 希代美

6月よりボランティア研修生として参加させていただいている高柳希代美です。過去に私自身が名大病院にお世話になり、手術を受けました。他病院では見つけられなかった病巣を発見していただき、治療できたことは、私にとって運が良かったの一言に尽きます。早期発見をしなければ治療は複雑になり、体力気力ともにダメージが大きかったことは確実です。あれから5年、幸いにも健康を取り戻すことができました。初めて訪れたときのボランティアさん、病院の方の姿を覚えています。患者さんや家族の方が病院に通うということは辛いことです。その中で少しでも笑顔によって安らぎを感じてもらえたら嬉しいです。これからは多くの方々に感謝の意を込めてボランティア活動をさせていただきたく思っています。よろしく願いします。



加藤 郁子

はじめまして。5月よりボランティア活動に参加させていただいております、加藤郁子と申します。

私は4月に岐阜県から名古屋に引っ越して来たばかりで、何から始めていいのか戸惑いながら色々考えてみて、何か少しずつでも自分がお役にたてる事はないかと思い、こちらのボランティア活動のお仲間入りをさせていただくこととなりました。不慣れで先輩方にご迷惑をおかけすることばかりですが、患者さんやご家族の方の立場にたって、お手伝いできるような活動していきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



川合 恭嗣

5月からお世話になっている川合と申します。名大病院には縁があり、沢山の施しを受けさせていただきました。私の左眼には、残念ながら光がありません。一時はとても深く落ち込みましたが、健常だった時に読んでいた本や、医師や看護師の方に救われて、何とか乗り越えることができました。サービス業をやっていた関係で、「ホスピタリティ」という言葉には深い思い入れがあります。私がこの病院で受けた良い縁を、一人でも多くの人たちと継ぐことが出来るように一生懸命頑張っていきたいと思っております。また、私に携わって下さった医師の方々、元気を下さった看護師の皆さん、本当に有難うございました。



「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」の 広告が2013年度電通特別賞を受賞

脳神経外科長 若林 俊彦

病気で入院している子どもは、そのころも体も弱まっており、母親が常に付き添っていなければ、病気に負けてしまいます。しかし、入院中に付き添う家族には、看病に疲れ果てたところや体を休める空間が、病院内には殆どないのが現状です。この解決のためのボランティア活動「ドナルド・マクドナルド・ハウス」が全世界で展開されてきており、日本でも、10年前に東京の国立成育医療研究センターに最初のハウス(せたがやハウス)が建設されて以来、既に8カ所で運用されています。

東海・中部地方では、初めてとなる「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」の建設が名大病院敷地内で進んでおりますが、建設するにあたり、資金予定額に未だ十分でなかったため、不足分を充当するための、中部地区を中心とした地元の募金活動が必要となりました。そこで、松尾前病院長が設立募金委員会発起人代表に就任し、その活動を、様々なメディアを介することによる支援の呼びかけを開始しました。広告のコンセプトは、「病気の子どもを支える母親の愛の絆」であり、それを見事に表現した新聞広告やテレビ広告が完成しました。そしてこの度、その内容が高く評価され、全国の数十万ともいわれる広告の中から、500名もの選考委員による厳正な審査の結果、5つの賞を一気に受賞することとなりました。まずは、新聞広告電通賞(新聞広告部門の全国一のグランプリです。2ページ全面広告の紙面で、そのコン



セプト「一緒にいてあげたい。その思いが私と、息子を引き離した」が一見してわかります)、テレビ公共部門最優秀賞(テレビ広告「息子のもとへ」;60秒にわたる素晴らしい映像で、白血病に倒れ入院中の息子のもとに届けようと、お母さんが朝早く起きて大好物のお弁当を作るシーンは心を打ちます)、名古屋地区広告賞(新聞広告のグランプリは、名古屋地区でも第一位です)、準名古屋地区広告賞(名古屋地区で展開されたすべての募金告知プロモーション展開活動に与えられました)です。そして以上の4点の賞を獲得し、「広告で社会貢献をした」ことに対して、今回急遽設けられた広告電通賞特別賞を受賞することとなりました。特別賞受賞のために登壇した松尾前病院長はやや緊張した面持ちで、しっかりと記念トロフィー(広告電通賞ブロンズ像)を受け取られました。

このトロフィーは、「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」竣工後、ハウス内に飾られる予定です。なお、この広告の映像は、名古屋市営地下鉄「名古屋大学」駅構内で常時放映されており、名大病院公式ホームページからもご覧になれます。

このような皆様のご理解とご支援にて、「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」が実現する日が、いよいよそこまでやってきました。今秋に完成予定です。



「ドナルド・マクドナルド・ハウスを名大病院へ」
2012/05/28 朝日新聞45段(抜粋)

行事報告

○「キャンパスクリーン」を開催しました

6月13日(木)に「鶴舞地区のキャンパスクリーン」が職員及び学生等の協力を得て実施されました。これは、名古屋大学の構内環境美化及び環境省が提唱する6月の環境月間に環境保全に対する関心を高める目的に毎年実施しているもので、一般道路と接する境界の外周清掃も併せて行い、環境美化に努めています。

当日は、汗ばむ程の陽気の中、参加者は、鶴舞地区を分担区域ごとに分かれ、空き缶・紙くず等の除去を行いました。参加者の中にはゴミの除去のみならず草取りにも精を出し、90Lのゴミ袋に何杯も草を集めて来る方もいました。

鶴舞地区の皆さんには、ご多忙なところを協力いただき、本当にありがとうございました。



○七夕コンサート

看護部 副看護部長 横山 恵

7月5日(金)に、七夕コンサートを開催いたしました。音楽会は今回で8回目になります。浴衣姿での司会は総合診療部の鈴木富雄医師と12E病棟の長谷川万利子看護師です。ハンドベル演奏から始まり、ピアノ演奏、フラダンス、バイオリン演奏の内容でした。プロ顔負けの演奏は救急・内科系集中治療部の浅田馨医師のピアノと沼口敦医師のピアノ伴奏です。夏の気分を味わうフラダンスは12E病棟の三宅唯貴美看護師です。彼女の出演を待っているファンもいらっしやるようです。最後は、4月に当院に就職して、新たに仲間に加わったバイオリン演奏の宮之上司看護師とピアノ伴奏の中村志帆看護師です。前日までとは違って、暑い一日でしたが、涼しげな音楽が、さわやかな風を運んでくれた、夏の午後のひと時でした。



司会の様子



ハンドベル演奏



フラダンス、ピアノ演奏、バイオリン演奏の様子

行事報告

○「レ・ヴィオレッテ サマーコンサート」を開催しました

6月27日(木)中央診療棟2階リハビリ広場にて、ピアノ、フルート、ソプラノの3人のメンバー(レ・ヴィオレッテ)によるサマーコンサートを開催しました。今回は3回目になります。演奏はクラシック音楽から始まり、バッハのG線上のアリアをフルートとピアノで、オペラから抜粋したアリアをソプラノ、フルート、ピアノで数曲演奏され、伸びのあるソプラノがホール全体に響いていました。後半はクラシック以外の曲目から、サウンドオブミュージックの「私のお気に入り」やウォルトディズニーから数曲、ビリー・ジョエルの「オネステイ」も演奏され皆さん静かに聞き入っていました。最後に唱歌「ふるさと」を参加者全員で歌いコンサートを終了しました。



○「名曲クラシックコンサート」を開催しました

7月10日(水)中央診療棟2階リハビリ広場にて、ピアノ、バイオリン、ソプラノによるクラシックコンサートを開催しました。演奏は、ボッケリーニのメヌエットやドボルザークの「ユーモレスク」等よく知られた曲目から始まり、プッチーニのオペラやヴィヴァルディのカンタータからのアリアをソプラノで歌う等、珍しい曲も披露されました。途中、ピアノソロも披露されました。ヴィヴァルディは「四季」で有名ですが、カンタータも聞きやすい曲でした。また、バイオリンの小畑さんは、以前名大病院の産婦人科医としても勤務されていたそうです。ソロとしてもきれいな音色で心地よいものでした。今回も演奏終了後、参加者全員で「ふるさと」を歌いコンサートを締めくりました。最後に、患者満足度委員会委員長の松下先生から感謝状が贈呈されました。





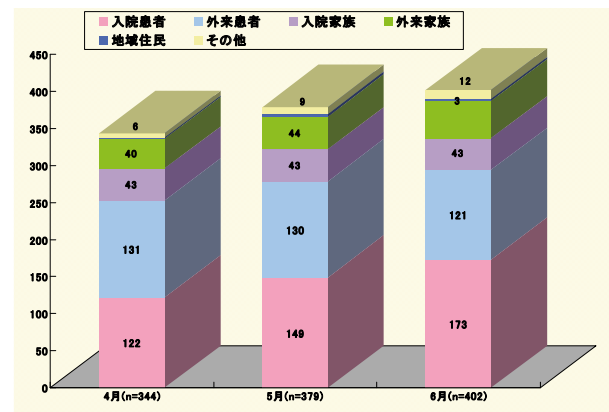
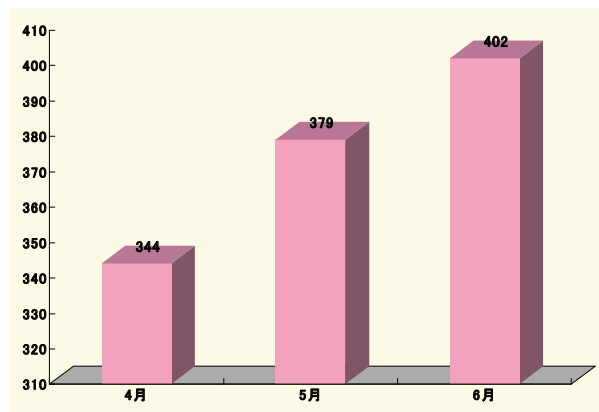
十ティック通信no. 32

TOPICS

- ✓ 平成25年度4月～6月 統計
- ✓ ちぎい絵教室のご報告
- ✓ 十ティック委員の寄稿



平成25年度4月～6月 十ティック利用者統計



【ちぎい絵教室のご報告】

開催日：毎月第3週目の月曜日 14時から15時

広場十ティックでは7月22日(月)にちぎい絵教室を開催しました。参加されたみなさんは、ボランティアさんのお手本を参考に、夏らしいスイカや花火などのちぎい絵を楽しそうに作成されておられました。ちぎい絵教室は毎月開催していますので、ぜひご参加ください。





放射線部 副診療放射線技師長 櫻井康雄

前任者より引き継ぎ、患者情報センター運営委員になって3年目。今現状を振り返るに何をしてきたのだろうか。運営委員会には顔を出してきた？（何回かは出席できなかったが）。ナティックの利用者の増加に向けて役に立ってきたのだろうか。

「ナティックって知ってる？」放射線部内のメンバーに尋ねてみる。
「ウィッグ・頭皮ケア相談会、リンパ浮腫のケアの学習会などのイベントの企画は放送案内で知ってるよ」
「じゃあ広場ナティックの場所は？」だんだんおぼつかなくなる。入ったことはとなると…。

ナティックとは「Nagoya University Disease Information Centerの略NADIC」で、患者情報センター「広場ナティック」は、患者さんやご家族が自分自身で健康や病気に関する情報収集ができるように、名大病院が支援する施設で、ボランティアの方々、看護部を中心としたメンバー、病院関係者により運営されています。

医療に関する書籍、パンフレットが参照でき、インターネット利用、DVD閲覧も可能で、手づくり教室、ちぎり絵教室、神経内科音楽療法、老年内科音楽療法、がん相談員の出張相談、ウィッグ・頭皮ケアの相談会などイベントや平日の午前午後それぞれにビデオ上映会が行われています。

しかし、ナティックの利用は少し伸び悩んでいる状況です。中心的なメンバーではありませんが、ナティックの利用者の増加に向けてできることは、まず広報活動。第一に放射線部内のインフォメーションからはじめたいと思います。
より多くの方に利用していただけるよう、そしてナティックの発展のために、広報活動、整備された書籍、情報の最新化に協力できればと思います。

***** ナティックの活動報告はインターネットでも確認できます *****

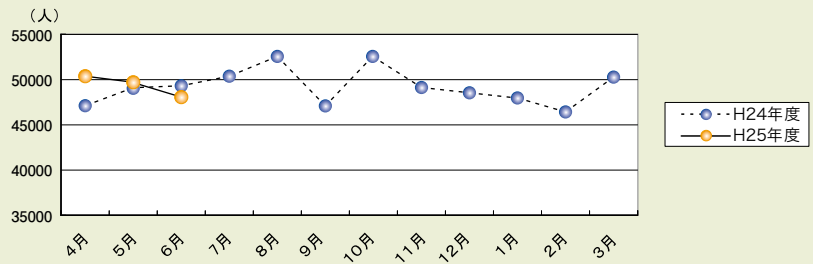
名古屋大学医学部附属病院のホームページより
最新情報
病院かわらばん（バックナンバー含め）
ナティック通信 の順で確認できます。



名大病院の医事統計

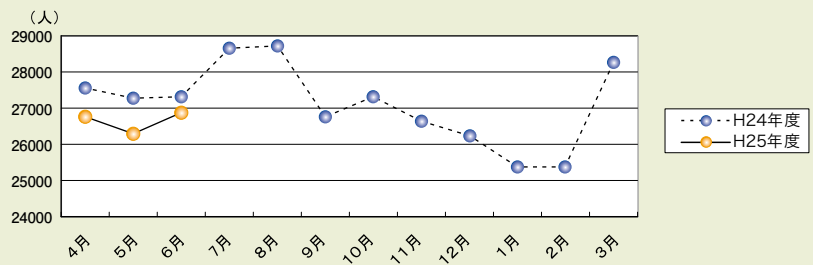
経営企画課

1. 外来患者数の推移



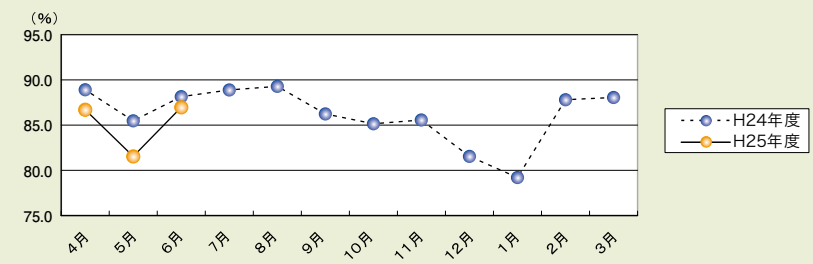
2. 入院患者数の推移

(註) 入院患者数は、在院患者延日数 + 退院患者延日数です。



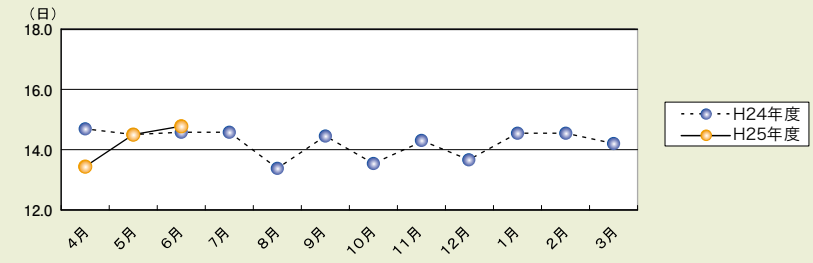
3. 病床稼働率の推移

(註) 病床稼働率の計算は、実働病床数 1035 床に対する割合です。

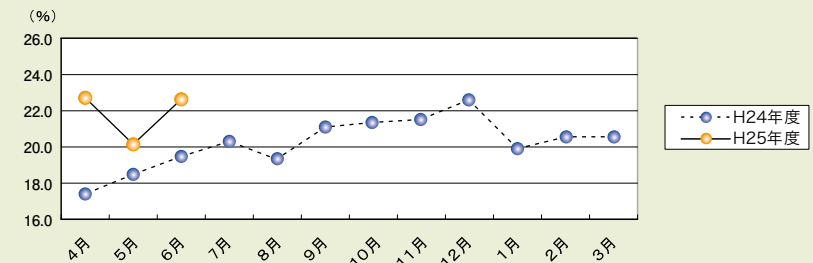


4. 平均在院日数の推移

(註) NICU, 精神病棟等を除いた一般病棟の健康保険上の平均在院日数です。

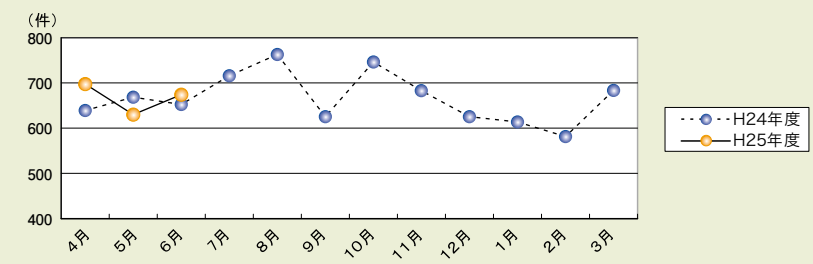


5. クリニカルパス適用率の推移



6. 手術件数の推移

(註) 中央手術室での手術件数のみです。



編集後記

厳しい残暑もようやくおわりを迎え、風が涼しいと感じられるようになってきました。秋の気配とともにやってくるのが、毎年恒例10月初旬のノーベル賞週間です。

ノーベル賞は、ダイナマイトの発明者であるアルフレッド・ノーベルの遺言により創設され、物理学、化学、医学生理学、文学、平和、経済学の6部門で顕著な功績を残した人物に贈られる世界的な賞です。日本でノーベル賞というと、東大、京大のイメージが強いかもしれませんが、実は、21世紀に入ってからノーベル賞を受賞した10人の日本人のうち、4人が名古屋大学の関係者です。PR不足なのか意外と知られていませんが、なかなかすごいんです、名古屋大学。

受賞といえば、現在、患児の付き添いの家族が利用できる滞在宿泊施設として鶴舞キャンパス内に建設中の「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」に関する新聞広告が、広告電通賞と朝日広告賞を受賞しました。この賞も広告業界ではかなりすごい賞です。

同ハウス建設のため募金いただいた皆様ご協力ありがとうございました。

ドナルド・マクドナルド・ハウスも、もうすぐ完成を迎えます。

(総務課総務掛 平松利朗)

お知らせ 『かわらばん』は、名古屋大学医学部附属病院ホームページでもご覧いただけます。

ホームページアドレス

<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/>

(トップページ ⇒ 最新情報 ⇒ 病院かわらばん)

かわらばん編集委員会

顧問	石黒 病院長	塩崎 事務部長
アドバイザー	室原 豊明	
委員長	中島 務	
委員	鈴木 富雄	石川 和宏
	阿部 真治	高津 真由美
	植村 真美	稲垣 祐子
	曾谷 祐一	平松 利朗
	下坂 香	堀 貴菜
	長谷川 清子	高井 真治
	隅坂 弘幸	

No.90
医学部・医学系研究科総務課
TEL 741-2111
(内線5003)
かわらばん編集委員会
発行日 2013年10月1日